

2017年5月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

私たちの世界と神

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』ちくま学芸文庫／人間の感官(六処)に関する經典群／六処相応／13
一切

(2) 主題

仏教が考える「私たちにとっての世界」と「神」について学んでみたいと思います。

2. われわれにとっての世界

(1) 「現象」について

仏教学者の水野弘元博士は、仏教が取り扱う現象について、次のように述べています。

「現象のことを仏教では有為(うい：造作されたもの)とか行(ぎょう：諸行無常の行＝変化しながら存在している現象)とかいう。われわれはこの現象界の中で生滅変化し、苦しみ、悩み、喜び楽しみ、迷い悟るなどの生活を続けている。われわれにとっての世界は現象界のみである。この意味における一切の現象界を仏教では一切とか一切法とか呼んでいる。仏教が取り扱うのはこの現象界に限られる」(水野弘元著『仏教用語の基礎知識』春秋社、p.126)

(2) 有為

「有為」は「造作されたもの」とあります。「原因と条件によって造りだされたもの」という意味です。私たちにとっての世界は、「原因と条件によって造りだされたもの」の世界であるということです。

(3) 行

「行」は「諸行無常の行」で、「変化しながら存在している現象」とあります。私たちにとっての世界は、「変化しながら存在している現象」の世界であるということです。

(4) 現象界

私たちにとっての現象界は、「原因と条件によって造りだされたもの」の世界であり、「変化しながら存在している現象」の世界です。この現象界が、私たちにとっての世界のすべて(一切、一切法)なのです。

仏教は、この現象界だけを取り扱います。このことが、阿含經に説かれています。

3. 一切

(1) 経文

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティ（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、『比丘たちよ』と呼ばせたまい、彼ら比丘たちは、『大徳よ』と答えた。そこで、世尊は、つぎのように説いて仰せられた。

『比丘たちよ、なにをか一切となすのであろうか。それは、眼と色（物体）とである。耳と声とである。鼻と香とである。舌と味とである。身と触（感觸）とである。意と法（観念）とである。

比丘たちよ、これらを名づけて一切というのである。』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 044～045）

(2) 「一切」とは

「一切」とは、「存在するものすべて」、「あらゆるもの」という意味です。

(3) 六処

① 認識の成立

ここに、「眼と色（物体）」、「耳と声」、「鼻と香」、「舌と味」、「身と触（感觸）」、「意と法（観念）」とあります。これは、人間の感官とその対象を表わしています。これを六処と言います。

これについて、増谷文雄博士は次のように説明しています。

「六つの感官とその対象が相関係して認識の成立するを『六処』ということばをもって表現したのである。つまり、わたしどもの認識の成立するためには、内なる感官と外なる対象とがなくてはならぬのである……」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 017）

② 感官・対象・認識

六つの感官（眼・耳・鼻・舌・身・意）を「内（ない）の六処」あるいは「六根」と言います。

六つの対象（色・声・香・味・触・法）を「外（げ）の六処」あるいは「六境」と言います。

感官と対象が相関係して認識が生じます。これを「識」と言います。「内の六処」と「外の六処」が相関係して「六つの識」が生じます。これを「六識」と言います。

③ 一切

この経文では、内の六処と外の六処が相関係して六識が生じることが、現象のすべてであると言っています。

4. 自分の世界

(1) 自分の一切

自分の感官（内の六処）が、対象（外の六処）と相関係して、自分の認識（六識）が生じます。これが「自分の世界」であり、「自分の一切」です。

(2) 自分が取り扱えるものごと

「自分の世界」に存在するものごとは、自分で取り扱うことができます。

(3) 自分が取り扱えないものごと

「自分の世界」に存在しないものごとは、自分で取り扱うことはできません。

5. それぞれの人の事実

(1) それぞれの人の事実

人間一人一人が、それぞれに「自分の世界」を持っています。

(2) 会話

「自分の世界」と、「他の人の世界」には、重なり合っている部分と、重なり合っていない部分があります。

自分と他の人とは、それぞれの世界の重なり合っている部分を通して会話を交わすことができますし、意思疎通をすることができます。

6. 現代科学の研究対象

(1) 現代科学の対象は現象界

水野弘元博士は、現代科学の研究対象について、次のように述べています。

「今日の科学の研究対象はすべて現象だけであって、本体や実体といわれる形而上学的存在は、経験によって認識判断され得ないから、科学の対象とならない。現象界のみが科学の対象である。自然科学は自然現象を、人文科学は人文現象を、社会科学は社会現象を研究対象とするのはそれである。この限りにおいては、仏教は今日の科学と同じく現象界を対象とする。ここに仏教の近代的合理性があるといえる」（水野弘元著『仏教用語の基礎知識』春秋社、p. 127~128）

(2) 現代科学が扱うもの

現代科学は、ものごととものごとの相互作用を扱います。原因・条件・結果・影響の関係を扱うと言ってもいいでしょう。

(3) 現代科学と仏教の共通性

現代科学が扱う対象と、仏教が扱う対象は、共通しています。どちらも、経験によって認識判断できる現象界のみを取り扱います。

5. 形而上

水野弘元博士の論述に「本体や実体といわれる形而上学的存在」とあります。「形而上」について学んでみたいと思います。

(1) 「形而上」とは

「形而上」とは、「形をもっていない」とか、「人間が認識することも経験することもできない」というような意味です。

(2) 形而上学

人間が認識したり経験したりできる世界の奥に、人間が認識することも経験することもできない究極の世界があって、それが本当の世界なのだというようなことを論じる学問を「形而上学」と言います。

「人間が認識することも経験することもできない存在」を「形而上学的存在」と言い、このような存在を「本体」とか「実体」と呼んでいます。

(3) 形而上学的存在は現代科学では扱わない

人間が認識することも経験することもできない形而上学的存在は、現代科学では扱いません。

5. 他の一切

(1) 経文

「『比丘たちよ、もし人ありて、くわたしは、この一切を捨てて、他の一切を説こう』と、そのように言うものがあつたならば、それは、ただ言葉があるのみであつて、他の人の問いに遇えば、よく説明できないばかりか、さらに困難に陥るであらう。何故であらうか。比丘たちよ、それは、ありもしないものを語っているからである。』」(増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 045)

(2) この一切を捨てる

経文の「この一切を捨てて」は、「私たちが認識できる存在を無視して」というような意味に受け取れます。

(3) 他の一切

「他の一切」とは、「私たちが認識できない存在」ということになります。「形而上学的存在」を指していると考えられます。

(4) 説明できない

ここに「他の人の問いに遇えば、よく説明できない」とあります。

形而上学的存在は、存在していると主張する本人も認識できないのです。このため、理性的に筋道を立てて質問されますと、最後には答えられなくなるということです。

おそらく、釈迦牟尼世尊と他の宗教者との間にそのような議論が行われ、他の宗教者が答えられなくなるということが多々あったのであらうと、私は推察しています。

6. 仏教では「神」を説かない

(1) 人間が認識できない神

「人間が認識できない存在」や「人間が経験できない存在」を「神」として信じ崇める宗教があります。このような神は、人間には認識できない存在であり、経験できない存在だから、人間よりすぐれた存在なのだと、説明されることが多いようです。

仏教では、「人間が認識できない存在」や「人間が経験できない存在」を扱いません。ですから、仏教では「神」を説きません。

(2) 絶対的存在はない

庭野日敬師は、次のように解説しています。

「すべてのものごとは縁起の法によって存在しているのであって、あるものが絶対的存在であるとか、すべてのものごとの根源の存在である、というものは何もない」（庭野日敬著『法華三部経各品のあらましと要点』佼成出版社、p.16）

ここから、「絶対的存在である神」「根源の存在である神」は存在しないということになります。仏教が「神」を説かない根本的な理由が、ここにあると思います。

7. 仏教における神々

(1) 神を信じる人びと

釈迦牟尼世尊は、「神を信じる人びとがいるという事実」を受け入れました。そして、人びとが信じている神を否定することなく、かえって、人びとを真理に誘うような意味づけをしたようです。

(2) 仏教が取り入れた神々

バラモン教やヒンドゥー教の神々が、仏教に取り入れられて守護神になったり、信仰の対象になったりしている例が多数あります。

梵天、帝釈天、四天王（持国天・増長天・広目天・多聞天）、毘沙門天（多聞天が単独で祀られる時の名）、執金剛神（寺社の門前に立つ仁王）、吉祥天、弁財天（もとは弁才天）など

(3) 阿含經典に登場する神

阿含經典にも、神々が登場します。代表的な神に、梵天、帝釈天がいます。

中村 元著『仏教語大辞典 縮刷版』（東京書籍）の解説をみます。

① 梵天：インド思想で万有の根源ブラフマンを神格化したもので、仏教に入って色界の初禪天をいう。（中略）帝釈天と並んで護法神とみなされた。

② 帝釈天：インドラ神。ヴェーダ神話における最も有力な神であったが、後、仏教にとり入れられて梵天とともに仏法を守護する神とされた。（以下略）